

休日

岡崎 良介



岡崎良介オフィシャルサイト
okazaki-ryosuke.com

巨匠と呼ばれる備前焼の先生にこんなことを尋ねられた。

「あなたは何故、焼き物に興味を持ったのですか？」

繕う必要もないと思い、正直に私はこう答えた。

「料理を作ることが好きで、色々挑戦しているうちに、いつの間にかその料理を盛る器に心惹かれて行ったのです」

先生の顔がほころんだ。

「それは一番いい入り方でしたね」

「それはどういうことでしょうか」

しばらく空を見やり、それから先生はゆっくりと語りだした。

「アートだの芸術だのと頭から入ると話がややこしくなるのですよ。

もっと自然に欲望のなせるまま器を見つめてもらった方が良い」

「何よりも器は手に取って細部を見やり手触りを楽しみ、食べ物を入れた時にその美しさと香りを楽しむことが大事なのです」

用意されていた抹茶を飲み干すと、先生はいたずらっぽく笑い、さらに続けてこう言った。

「その器は唐津ですよ、備前じゃない」

確かに器の色は深い緑、そして手に触れると粗い土の感触がした。そこに鮮やかな明るい緑の抹茶が揺らいでおり、絵画のような静寂とコントラストを醸していた。甘い香りが、確かにいつもよりもしっかりと感じられた。

「そしてそのお菓子は自家製です。おいしいでしょ。自分で作るのが一番です」

「土にはその中から生まれてくる命のごときものがあり、それが良い器を形作るのですよ」

結局、先生はこの日ひとつとしてご自身の作品を私に説明することなく、ただひたすらにこの大地に宿る精霊のごとき“創造力”のようなものを、ひたすら語って下さった。

そして帰り際には、先生は自宅の床の間に飾ってある、弥生時代のものと思われる、ひび割れた大きな甕を見せて下さった。名も知らぬ花が一凛活けてあり、美しさ可憐さというよりは、圧倒的な存在感、それこそ“物の怪”と呼べるようなオーラを放っていた。

写真を撮ることも、話を録音することも忘れ、ただただ話を聞くことに夢中で、あっという間に時間が過ぎてしまった。

最後まで、“合理性”とか“効率性”とかいった概念を考えることはなかった。

岡崎 良介



岡崎良介オフィシャルサイトでは、
メルマガ・週間戦略・月次ミーティング等
様々なサービスを提供しております